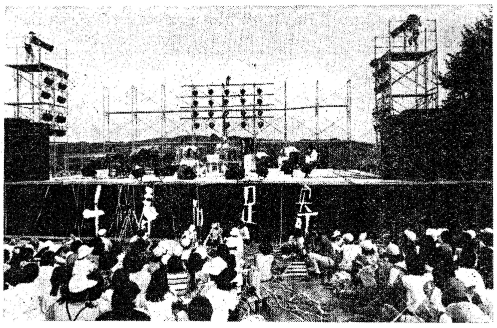
大空と大地の中で

—千春イン足寄—



八月八日の『千春イン足寄』は晴天に恵まれて、千春も燃え五十名のスタッフも熱の入れよう、よりよい歌とステージにとガンバリました。

交通輸送の関係や宿泊施設がすくないので、なるべく日帰りできる範囲内にと限定はしたものの、それでも道内各地はもとより東北から東京、大阪方面から遠く九州、沖縄までも五千人の観客がつめかけました。

はじめに松山千春足寄後援会長の小林弘道町長から常日ごろからファンのみなさんのご後援に心からお礼を申しあげます、本日のここで生れ故郷での野外コンサートの開催にあたりそれぞれ関係各機関の厚いご好意により盛大に開催でき地元の町長として心からお礼を申しあげます、千春君は常に足寄のことをPRして頂き地元として心からうれしく思っている状態で、各地のファンの方々のご後援にお応えする意味においても千春の盛大な後援会をつくりたいといま一生県命にとすすめており、間もなく立派な町をあげての後援会をつくることになつています、どうぞみさん、千春君が末長くフォーク歌手として活躍できるようにファンのみなさんの末長いご後援をお願いいたします

とのあいさつがありました

会場は足寄市街全体を一望に見渡し、その前方の山々から遠くは阿寒富士、雌阿寒岳が望める高台の里見ガ丘の一角にステージを設けたもので、右の写真のようにかなり広くて高い鉄骨づくりの舞台で、その両側に東京にしかない真つ黒な大拡声機をデンと備えつけその上のヤグラのテツペンから双方から大スポットラたトを舞台に照りつける、舞台中央奥の二十個の大型ガラス玉は赤、黄、緑のライトで、歌の進行につれて点滅する仕掛けになつています。

定刻午後一時になると、いつも千春のレコード吹込みのさいのバックとなつている東京の一流ミュージシャンが舞台に勢ぞろいしたところで、「君はそばに」の前奏に乗つて白いブレザー一枚にスリムのブルージンというラフなスタイルで登場、一曲を歌つたところで、拍手に応えて

ようこそ、足寄町で、ではまた来週（笑声）アホカ、けど、お前らよくきたナ、きのうリハーサルやつたんだけどそんときチヨツと雨ふつて今日大丈夫かと思つた、オレ雨男といわれて九州では雪をふらした男だがらーお前ら日ごろのおこないがよかつたナ、エライぞ、いろんなところからきてくれてどうもありがとう、今日は何曲歌えるかわからないけど、何時間やれるかわからないけど、二日間ぐらいはできると思うここはふだんのコンサートとは違うから野外でなんにもないとこだしーけど足寄つて意外に大きいべ、勉強になつたべ、それをいいたくてなあオレは、町長も格好よかつたべーそれでは最後までガンバルんで、よろしく哀愁！

といつた調子で会場のヤングを笑わせておいて、いつものように一人でギターの弾き語りでなく、うしろに伴奏陣が控えているのでハンドマイクを片手に、広い舞台を上手や下手を自由に異動しながらの歌いつぷりで二曲目の『銀の雨』を歌つてから

どうもありがとうネ意外に歌詩を間違えたりしちつて、だれでもあるんだ責めちやいけない、風が吹いて歌詩カードが見えなかつたりしてネ、この曲をつくつたのはオレなんだから適当に詩を変えようと、大きな人間になれないぞー意外に適当なことをいつたりしてナ、一番だらしないのが自分だつたりしてー今日はとても熱いんでネ、ヒヨツとしたら日射病にかかり易い状態なんで、お前ら顔なら無理だらろナ、陽もさけて通るべ、ホントに気をつけてナ、ノンビりきいて下さい

いつまでも心にのこる
各種おくりもの
内祝・全快祝・快気祝
常時大量品揃い
特価奉仕！
足寄綜合衣料デパート
久保呉服店
電話代表5－2148
有線－2668

つぎに「時のいたずら」を歌い

こうしてハンドマイクを使つて歌うのはないことでたまにコンサートで一番最後にーオレだつてハンドマイクで歌つてみたと思うぞ、コンサートのときギターはオレだべ、ハンドマイク足でやれというのか、できなかつたけど今回はすばらしいバックといいうか、オレがレコーディングのとき彼らのチームに頼んでレコードをつくつてるんだけど、まずリーダー、エレキギターの安川さん、これは一番体格いいんだはドラムの岡本君、オレのチームは無口が多いオレを筆頭に、ベースの本田君、彼らは一派のミュージシャンでない、私もギターもたせば一流だ、だからかなりギャラが高いわけヨそういう話しはしたくないけど一回の公演のギャラをきいたらビツクリするぞ、けどオレのコンサートということでみんな二百円づつできてくれた二百円でキャンデー買つて帰るといつたりしちつてーこんどは自己紹介をしてみよう、『あの倉田です』気弱いからいじめないで、もの持ちがいいんだは、これはパーカシヨンていうんですネ、ドラムカンをならべたんじやないヨ、担当の木村君『はじめまして』そして最後に登場するのが「時のいたずら」から「青春」「今回の「季節の中で」を編曲してギターを弾いてくれる清須さん、清須さんは本当はフォークシンガーなのオレよりズート先輩、自分でもLP出してとてもいい曲があるんでネーそれじや歌おうといつて「マイ自転車」を歌つて

（テント張りの楽屋でひと休み）

お前らこの暑いのにサングラスをとれーおこるぞお前、意外に今日すごく暑くてビツクリしちやつて、暑いなかみんなありがとう、遠く東京また九州、沖縄からきている人本当にどうもありがとうオレの生れた町つてのはこれだけの町です、あのあそこに見えるのが市街地、足寄の銀座通りというか三笠通りというメーンストリート、今日みんな通つてみない、みんな日の丸ふつてるからーそれからずつと向うに山が見える、あの雌阿寒岳までが足寄町です、こつちの方は境界が見えない、これだけの大きな土地のなかに一万三千人、過疎のあおりをモロにうけてうけたというか発詳地というか、とつても淋しいのは山の方へいく、もつと奥の方へいくと離農した人たちの家があつてガランとして傾いたりしてそういうの見るととつても淋しくなつて、できればみんなといつしよになつてこの町で住めたらなあと思うんだけどネ、これは仕様がないかもしれないけどネ、それじや

ここで「青春」を歌う

どうもありがとう、今日きてくれた人はほとんど若い、チヨツとヤバイ方もいるかもしれない、けど青春ということばに何才から何才という制限はないので意外にみんな入るのではないか、オレの青春というか高校時代、この会場の下に名門足寄高校があつてすごい名門でこの辺のみんなはあすこをめざす、あすこしかないからー名門足寄高校で僕チヤンはバスケツトをやつていてアジアの星とまでいわれていたが、チヨツと違うナ足寄町民の星といつてくれないか、バスケツトだけだつた、やる気になつたのは、英語は嫌いだし朝早くから夜遅くまでバスケツトやるために学校へ通つたようなもので、いつかオリンピックに出よう、まわりからも期待されてーオリンピックはどうでもいいんだけど十勝大会でせめて一回戦でも勝とうガンバツたが難しい、それがオレの高校時代のすべてのような気がして、それでみんなもできればーオレはいま歌チヤンにすべてをかけているけどーみんなもできればなにかひとつネーお前ら恵まれてるぞ、オレらというか、戦争なかつたし、僕体験したという人いるか、オレのガキのころは確かに貧しい生活をしていた、ハツキリいえば貧乏だ、段々オレが大きくなるにつれていくらか裕福になつているものネ、いまではほとんどの家庭にテレビはあるしオレたちは恵まれた環境に生れたんじやないかと思うんだけどネ、そんなかで不平不満をいうのはゼイタクじやないかと思うけどネ、いまのオレはアタツク・ヤングとせこくオールナイト・ニツポンー今日はこの会場に市川さんもきてるけど（ヘエーという声）「夕陽の祭り」でも歌つてもらうか、市川さん早く（拍手）みんな待つてるから、オールナイト・ニツポンのディレクターで歌手活動もしている市川さん『どうもこんにちは、歌はなんですから足寄にきたときの感想をほんのひとこと、すごく大地に根が張つている感じで、畑ばつかりでね、大地を相手にして生活している感じで千春がオールナイト・ニツポンで田舎臭い田舎臭いつて美学的にいつてるけど、すごい誇りをもつていつているつてことが実感としてわかりましたとてもいいところでコンサートやつてくれたと思います』市川さんでした北川さんあすこにいるわヨ、ヘツドホーンかけてるでしよう、横チンもみんなきてます、（ヘエーという声）チヨツと話しはずれたけれどみんななにかひとつ道を見つけてもらいたい、難しいけどナ、物質的には裕福だけど精神的には飢えているなんでも選べる、いろんな職業がある、それだけ自由だから考える部分もあつたりしてネ、そこはこの世代に生れた根性で努力、これしかないんではないか、なにかひとつにかけれるものを見つけて下さいーオレはここで生れて二十二年間、おやじつていう松山明さん、オレのおやじの生き方みてて、この町でせこくローカル新聞やつて時々新聞ナ、これをずーとやつてて、言いたいことは言つてきて金にならなかつたけどそれに自分の一生をかけてきた、だからおやじはオレに対してやりたいことはなんでもやれそのかわりコケようとよくなろうと最後までやれーおやじの生き方みたからオレはみんなにそんなものみつけてもらいたいなつて思う

といつて「父さん」を歌いながら後半はなみだをこらえた形の熱唱ぶりとなつていつたん舞台上手へ退場しました●

（以下次号へつづく）

この日の写真集

この新聞に掲載の大きさの白黒写真十種類は一組五百円で、この二倍の大きさのカラー写真（内容は白黒とは別）十種類一組二千円で（いずれも送料とも）おわけいたします。ご希望の方は郵便小為替を同封して本社へお申込み下さい●